

書陵部所蔵『狭衣物語』について——奈良絵本制作事情の一端——

田代圭一

一 はじめに

『狭衣物語』は、平安時代後期の承保年間（一〇七四―七七）頃、源頼国女（六条斎院宣旨、祿子内親王家宣旨とも）によって『源氏物語』の影響を受けて成立したとされ、以後の文学に大きな影響を与えてきた。『無名草子』では『源氏物語』に次ぐ評判の高さを記すほか、藤原定家撰の『物語二百番歌合』の前半「源氏狭衣百番歌合」や、藤原為家の撰とされる『風葉和歌集』には多くの歌が採録されるなど、物語評論・和歌の両面から高い評価を受けている。また、室町時代に成立したとされる『浄瑠璃御前物語』では『万葉集』『古今和歌集』『源氏物語』等と共に教養として読む書物としても記されている。写本として書写される間に諸本間の交渉や改変があり、諸伝本によってさまざまな本文を持っていることが特筆される。

宮内庁書陵部は複数の『狭衣物語』伝本を所蔵するが、その中に絵入りの十冊本がある。本書は、「奈良絵本」と称される、彩色を施した挿絵の入った冊子本である。近年、奈良絵本は石川透氏の精力的な研究成果をはじめと

して新たな伝本の紹介も相次いでいる。^①しかし成立年代の特定や制作事情については更なる検討の余地があり、今後多くの事例を集めつつ見解を導くことが求められている。筆者は以前、ここに紹介する伝本とは異なる閑院宮旧蔵の絵入十冊本『狭衣物語』（閑一〇〇〇）を紹介したことが^②中古文学や奈良絵本を研究対象とする研究者に関心を持たれることとなった。狭衣物語の絵画資料に関する研究は進展著しく、^③本書を紹介することは、江戸時代の『狭衣物語』享受のありかたを伝えることも含めた研究の進展に資することと思われる。本稿ではこれまでの成果を踏まえつつ、その概要を主として書誌学的観点から紹介し、併せて卑見を加えていきたい。

二 本書の書誌

まず本書の書誌について触れていくが、これについては『図書寮典籍解題文学篇』^④（以下『典籍解題』）に触れられているので引用し、続いて各傍線部について言及していきたい。

①桂宮絵入十冊本（五〇〇一―六三）で、二四糎×一八糎、胡蝶装^⑤、表紙は

紺紙に金泥で松に霞を畫き、金砂子を散らしたものである。中央の題簽は金泥で雲霞を描いた鳥の子紙に、『さころも（筆者注、五〇冊目は「さ衣」と記す）一之上（巻次）』、見返は金泥の花文亀甲繫ぎ、本文用紙は鳥の子紙であるが、②金描秋草を下絵した紙と素紙を交互に用ひ、要所に極彩色の挿畫を入れた華麗な本である。恐らく嫁入本であらう。一面一〇行、二〇字前後、歌一字下り、本文は前掲本（筆者注、室町時代末期写とされる四冊本、鷹一七三七）と同系本である③江戸中期の書写。黒漆塗箱入。④琴山の極札に『東久世三位博高卿狭衣卷全部
少年の割は』（筆者注、傍線部は「はる」と平仮名）とある。十冊の構成と墨付紙数、挿絵の数は表一に記した。

解題のうち、傍線部①の伝来を『典籍解題』では「桂宮」とするが、改めてカード類を調査したところ、本書は松岡家旧蔵本（以下「松岡本」）であることが判明した。挿絵はないものの、『二十一代集』四八冊（四〇〇―一〇）や『太平記』四二冊（五一〇―一五）等、紺紙表紙に金泥・砂子・切箔で山・霞・草木を描く同様の体裁を持つものが桂宮旧蔵であることにより混同したか。松岡本については『図書寮叢刊 書陵部蔵書印譜 上』^⑥に簡潔な説明が施されているが、筑後久留米藩士であった松岡辰方（一七六四―一八四〇）旧蔵本を指し、当部には明治二五年（一八九二）に約一二〇〇〇点が松岡家より移管されている。本書はその蔵書群の一であり、ここに『典籍解題』の情報を訂正しておきたい。松岡家の所蔵、つまり辰方が入手したであろうことを踏まえると、本書の制作はそれより遡ることになる。

②は本書の構造、さらには半紙縦型奈良絵本の制作事情の一端を語るものとして意味を持つ箇所と言える。下絵は本文料紙一面にわたって表裏それぞれに別の絵柄が描かれており、秋草の他に片輪車や虫文様も描かれている。

造本を行うにあたり、まず料紙を重ねて半折するのであるが、その際、本文や挿絵の配置は特に意識せず、機械的に下絵のある料紙と素紙を交互に重ねていったであろうことは、挿絵が貼られた料紙にも下絵が見られることから分かる。本書は列帖装（綴葉装）という、料紙を数枚（本書は九枚前後）重ね、中央から半分に折った状態で一括とし、数括（本書は四括）を糸で綴じた装訂である。本文は両面に書写されていることから、丁を繰るごとに表裏別の絵柄の下絵、次いで素紙と交互に続く。こうした形態は、挿絵はないが早稲田大学図書館蔵『新古今和歌集』四冊（四一八〇六二）も同様であり、半紙縦型の形態を持つ奈良絵本、さらには絵入りではないものの、大きさや装訂、表紙の作り方等で同様の体裁を持つ写本の制作事情を示す、注目すべき事例と思われる。挿絵は別に用意され、後で本書に貼られたものであろう。三冊目の絵の裏には「一」〜「六」の番号が書かれており、貼る順序を間違えることを防ぐためと思われる処置が施されている。石川透氏や濱田啓介氏が、絵と詞書は分業により制作されたと言ったことと符合する。

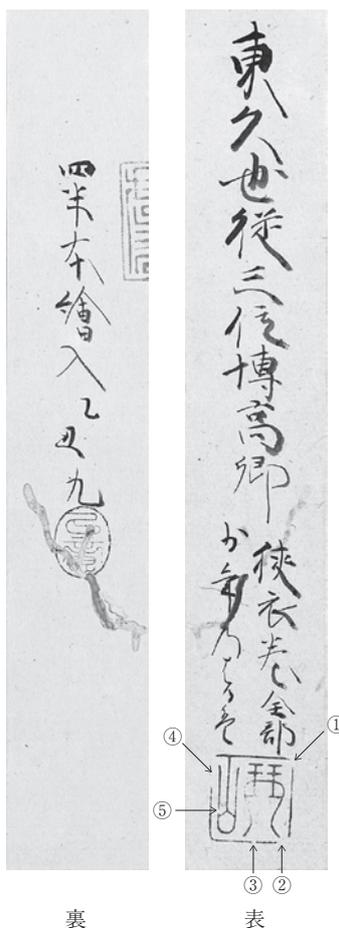
③、④については後述する。

本書の筆者（書写者）であるが、全冊を通じて一筆になる。参考までに巻一冒頭部を口絵二に掲げた。付言すると、口絵とは別箇所であるが「なのめならず」を「なのめ」（字母は「女」）ならめ（字母は「免」）と書き直す際、同じ字母の仮名を繰り返さず、その筆致も流麗であり、鑑賞されることを視野に入れて書かれているとも言えようか。

三 付属の極札について

ここで傍線部④の極札について言及したい(図版一)。極札の筆者を調べ
るには、江戸時代末期に数度にわたって出版され、鑑定家の系譜や印が掲載
されている印譜が便利であり、おおよその見当をつけることができる。縦一

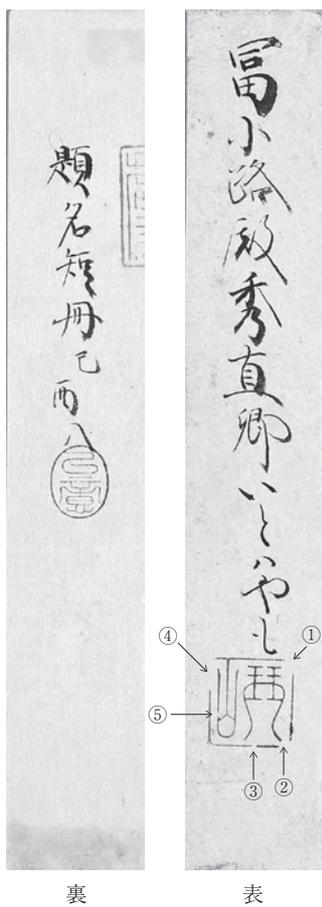
図版一



裏

表

図版二 (中村健太郎氏蔵)



裏

表

四・三 cm、横二・三 cm で、印譜によると裏の印は古筆家第九代、古筆了意
(二七五)〜(一八三四)と思われる。了意については中村健太郎氏により詳
細な考察がまとめられており、本稿でも中村氏の成果を踏まえ、筆跡・印文
の欠画・活躍年代による検証を進めていく。

図版一、二双方の筆跡を比較すると、全体を通して肥瘦の変化に富んだ書
風は重なっており、部分に目を向けると「卿」の旁である「卩」の位置がや
や下がり、大きく膨らんだ書き方が特徴的で共通している。その他、図版一
表「位」の旁「立」と、図版二裏「短」の旁「豆」の、右下に流れるような
くずし方、図版一表「東」「従」・裏「本」「絵」「入」と図版二表「路」「殿」
「秀」に見られる右下に長く延ばす右払い、更には図版一表「三」や裏「半」
と図版二表「直」に見られる最終画の収筆部分を右下に曲げることが共通し
ており、同一人物によるものと見なされる。

また、印文の欠画については、了意の用いた「琴山」印に五箇所欠画が
あることを中村氏は指摘されている。引用すると

- ① 印文外郭の右角上部 (中欠画)
- ② 印文外郭の右角下部 (中欠画)
- ③ 印文外郭の下中央部 (小欠画)
- ④ 印文外郭の左上部 (大欠画)
- ⑤ 印文「山」左側縦画 (小欠画)

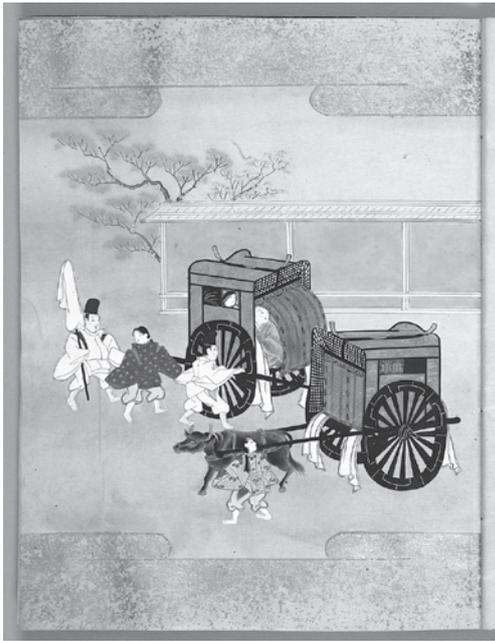
これらの欠画はすべて本書の極札にも備わっており(該当箇所矢印①〜⑤
を付した)、この点からも了意筆ということが裏付けられよう。

これらを踏まえて極札裏に記された鑑定年月(図版一裏)を確認すると、
「乙丑」年は文化二年(一八〇五)と考えられる。中村氏によると、了意は

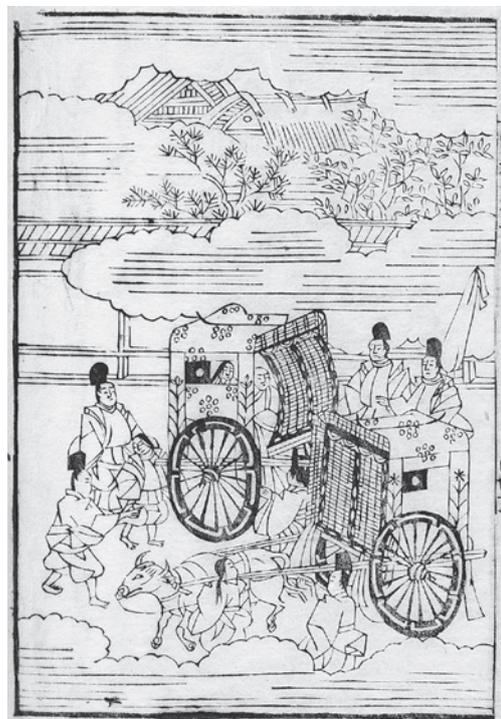
古筆家第八代、了泉が没した天明三年（一七八三）より第十代の了伴に家督を譲る文政八年（一八二五）まで琴山印を用いて鑑定を行っており、活躍年代からも合致するのである。

本書の極札は三枚の包紙で包まれており、本文末尾に図版を掲げた（外側から図版八、九、一〇の順）。筆跡から、図版九・一〇は古筆了意筆、図版八は別の人物の筆跡と考えられる。なお、伝承筆者の東久世博高（一六五九～一七二四）は、東北大学附属図書館蔵『東久世家日記』中に自筆の日記があるが、現時点では本書に関する記事を見出すには至っておらず、その筆跡も本書と同筆とは見なしがたい。

四 諸本間における本書の位置付け



図版三



図版四

次に伝本間における本書の位置付けを試み、併せて③にある、本書の成立（書写）年代を改めて確認したい。『狭衣物語』の絵画資料に関する考察は高橋亨氏に詳しいが、特に江戸時代に制作された絵入りの伝本の考察を行うにあたっては、本文が本書と同じ十巻構成である、承応三年（一六五四）刊の絵入り版本（以下「承応版本」と対照することが求められる。そこでまず挿絵について述べていくことにする。

表一は各図の簡単な説明であり、J1～J48は対応する承応版本の挿絵の通し番号を指す。本書の全六八図のうち、四七図が承応版本と一致し、本文中における位置も第三図が本書では承応版本の三行後に位置している他は全て同一である。図版三（本書第六図）・四（J7）のように、構図としては一致するものの、随身の人数が異なるなど、細部においては差異の見られるものもあるが、承応版本が全四八図ある中において、一致度の高さは相互の

影響関係を如実に物語つていよう。その一方で、版本にない挿絵も本書には見られ、主体的な享受の一面も垣間見える。

こうした中、場面の特定に不確かな箇所、または本文の内容と場面が一致しない箇所が見られる場面も存在する。表一に※印をつけた箇所であり、それらを図版一―一五として掲載した。今後の検討材料としたい。

挿絵を通じて本書と承応版本との関わりを指摘したところで、次に問題とすべきはどちらが先行するかという点であるが、結論を先に述べると、承応版本から本書へ、さらに承応版本は古活字本（寛永中刊十三行古活字本）からの流れが想定され、その手がかりとなり得る箇所を表二に対校表としてまとめた。アは寛永中刊十三行古活字本、イは承応版本、ウは本書の本文である。ウの下に付したカッコは新潮日本古典集成本文の該当頁であり、引用文に見られる空格や傍線は筆者が施したものである。

表二の a・e・h からは、ア・イに対してウに脱文が認められ、本書が刊本系の本文に拠っていることが分かる。そして b・c・d からはアに対してイ・ウに共通の脱文が見られること、f からはイ・ウが共通する本文を持つことが確認され、これらから承応版本から本書への流れが想定される。このことは、e に見られる本書の脱文「なく思ひくだけし心のうちは など露ばかりもかなふ事」（表二波線部）が、承応版本のちようど一行分にあたり、本書を書写する際に一行目移りしたことによるものと考えられることや、同様に d の波線部に見られる共通の脱文「見給ふも いまにはしめたるにはあらねと いとかう」が寛永中刊十三行古活字本の一行分にあたることから補強されよう。また、b は傍線部「いと」、c は傍線部「人」、h は傍線部「給」の目移りとも考えられようか。しかしながら、総じて本書の書写姿勢

は承応版本に比しての誤写は少なく、親本を忠実に書写していると言える。

『狭衣物語』の古活字本は前記寛永中刊十三行古活字本の他に先行する元和九年刊本と元和中刊無刊記本二種が伝存するが、g はアウいずれもが「加階」を「かくは」（字母は「可久者」とする共通異文を持つのに対し、古活字本のうち元和九年刊本と元和中刊無刊記本二種は、「くい」という字形の、字母を「可々以」とする、傍線部に連続活字を用いる本文を持つ。これは「かゝい」と植字したのであるが、寛永中刊十三行古活字本を刊行するにあたり、疊字を「く」と、「い」を「は」（字母は「八」と誤読したことによるものと考えられ、元和九年刊本と元和中刊無刊記本二種を承応版本の親本と位置付けるには無理が生じる。また、寛政十一年版本は承応版本の後印本であるが、落丁や衍丁があり、本文を忠実に書写している本書の親本たり得ない。

こうしたことから、寛永中刊十三行古活字本↓承応版本↓本書という流れが導き出され、本書の成立の上限は承応三年と考えられるのである。石川透氏も「江戸前期の途中から半紙型の縦型奈良絵本が流行し、それは江戸時代中期のはじめまで続く」と述べており、これらからも、本書の成立は③にあるように江戸時代中期に近い頃と推測されよう。

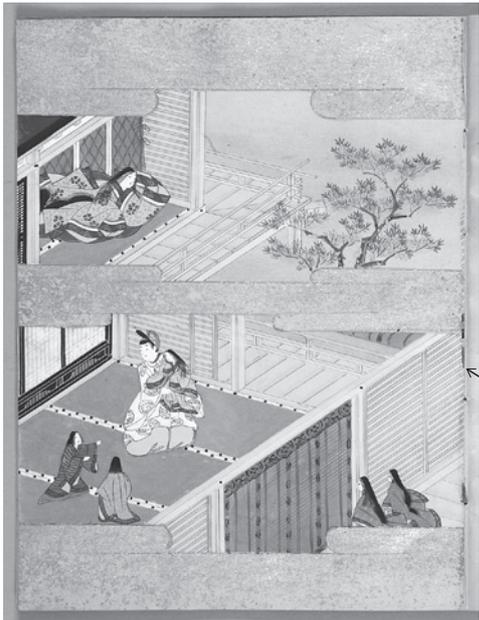
五 挿絵の制作事情

ここで本書の挿絵を更に観察していきたい。各図を細かく見ると、絵の右端、あるいは左端に別の絵の一部分がかかっており、これらはいずれも連続する絵の一部分であることが判明した。図版五・六は第三七・三八図である

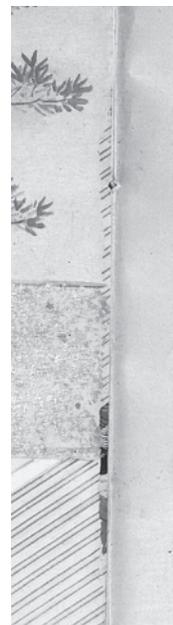
が、第三七図左端の女房の装束や扉の一部が第三八図（矢印）にかかっている。図版七はその拡大であるが、このことから、本書の挿絵は一枚の紙に複数の場面を描き、それを裁断して冊子に貼り付けたことが認められるのであ



図版五



図版六



図版七

る。こうした痕跡は表一のうち、カッコを付した場面に見られ、本書はこうした技法によって挿絵が描かれていたであろうことを物語っている。しかし三図連続する形跡は見られないことから、口絵三のような見開き状態の料紙に二図描き、その後半裁して冊子に貼付したのであろう。その際、版本になり場面はそれらだけをまとめて別に描いたのではなく、表一の20・21等のように、版本に見られる絵と連続している箇所が確認されることから、構図を練った上で描き進めていったと考えられるのである。

以上、本書から確認される挿絵の制作工程の一端を述べた。ここに挙げたのは一伝本の例にすぎないが、同様の形態を持つ半紙縦型奈良絵本には細部まで注意を払いつつ、今後も調査を続けていきたい。

六 おわりに

最後に、これまで述べてきた内容を摘記したい。

1. 本稿で取り上げた、書陵部蔵『狭衣物語』絵入十冊本（五〇〇一六三）は松岡家旧蔵であり、松岡辰方が入手、家蔵した本と思われる。
2. 本書に付属の極札は古筆家第九代、古筆了意の筆になる。
3. 本書の本文・挿絵は共に承応三年刊の絵入り版本に拠り、また、承応版本の本文は寛永中刊十三行古活字本に拠る。書承関係の解明により、本書の

成立の上限は承応三年となる。

4. 挿絵は見開き状態で二図描いたものを半裁して冊子に貼付したと思われる本文とは別に制作された。

これまで、当部蔵、半紙縦型奈良絵本『狭衣物語』を題材とし、少しく紹介を行ってきた。本文の校合といった文献学的な面と、書誌学的な面からの検討により、半紙縦型奈良絵本の制作事情にも言及してきたつもりである。

前述石川氏も「御伽草子の絵入り本には、手書きによる奈良絵本と印刷による絵入り版本とがある。両者の関係は、おおまかにいうと、奈良絵本から絵入り版本へととらえられるが、じつさいには、時代は重なっており、絵入り版本から写された奈良絵本も多く存在している¹⁴」と述べているように、さまざまな場合があったようである。奈良絵本のみならず、挿絵はないものの、同様の体裁を持つ写本においては冊子として仕立てることが主目的であるため、そういった類の伝本からは異本が発生することは少なく、刊本の本文に拠っている場合が多いように思われる。刊本は比較的刊行時期の特定が可能であるため、本文の比較対照によりある程度制作時期の範囲を絞ることが可能な場合もある。こうした観点からも、近世に入ってから書写された写本に関しては刊本との関わりを視野に入れるべきであり、今後さらさらデータを集積していくことが求められてこよう。本稿がそうした一助になれば幸いである。

注

- (1) 『奈良絵本・絵巻の生成』(三弥井書店、二〇〇三年)等。
- (2) 『平安朝文学研究 復刊第十四号』(二〇〇六年三月)。
- (3) 高橋亨『狭衣物語』の絵画」(『狭衣物語全注釈Ⅳ』所収 おうふう、二〇〇九年)、同『狭衣物語』現存絵画資料場面一覧」(『狭衣物語全注釈Ⅴ』所収 おうふう、二〇一〇年)、馬場淳子「和歌と絵画による後期物語の享受 院宮旧蔵『狭衣物語』の読解へ」(『王朝文学と物語絵』所収 竹林舎、二〇一〇年)等。

(4) 一九四八年、宮内府図書寮。

(5) 現在では「列帖装」や「綴葉装」と称されている装訂である。

(6) 一九九六年、宮内庁書陵部。

(7) 「奈良絵本・絵巻の制作」(『魅力の御伽草子』所収 三弥井書店、二〇〇〇年)。

(8) 「草子屋仮説」(『江戸文学』第八号、一九九二年三月。『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年に再録)。

(9) これらの印譜は村上翠亭・高城弘一監修『古筆鑑定必携』(二〇〇四年、淡交社)に掲載されている。

(10) 「有栖川宮家伝来・高松宮家旧蔵古筆手鑑『大手鑑』の鑑定について」(『禁裏本と古典学』所収 塙書房、二〇〇九年)。

(11) 注3高橋氏論考に同じ。

(12) 川瀬一馬『増補 古活字版之研究』(ABAJ、一九六七年)。また、『古典資料類従』七(勉誠社、一九七七年)に三谷栄一による解説がある。

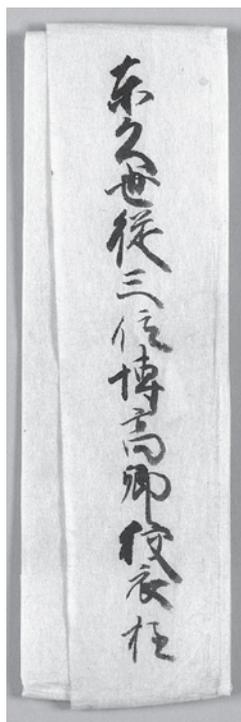
(13) 「文化資料と国文学」(『国語と国文学』第七七卷第一号、二〇〇〇年一月。注1に再録)。

(14) 『週刊朝日百科 世界の文学』二九(朝日新聞社、二〇〇〇年二月。注1に再録)。

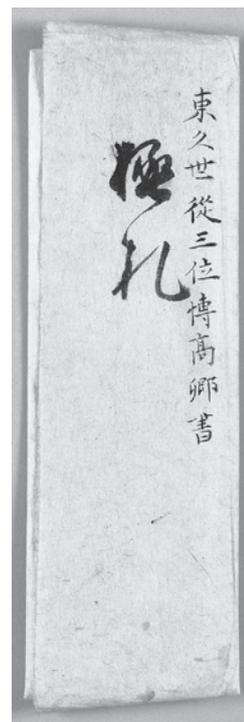
本稿の執筆に際し、中村健太郎氏、馬場淳子氏には大変お世話になりました。深謝申し上げます。



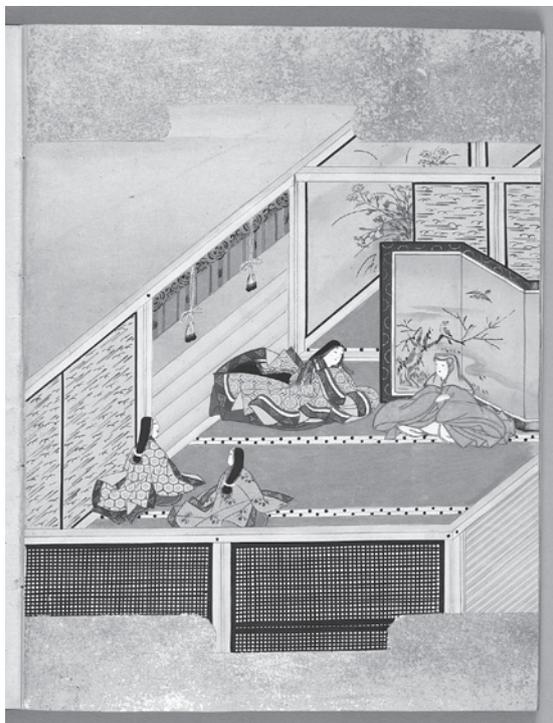
図版一〇



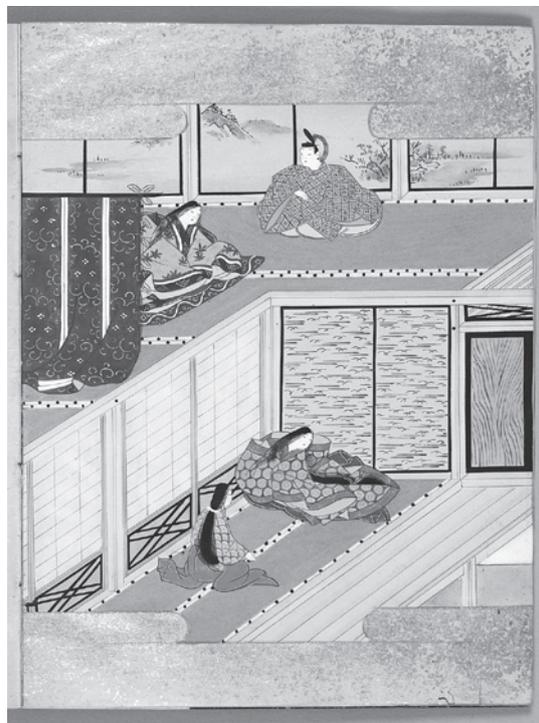
図版九



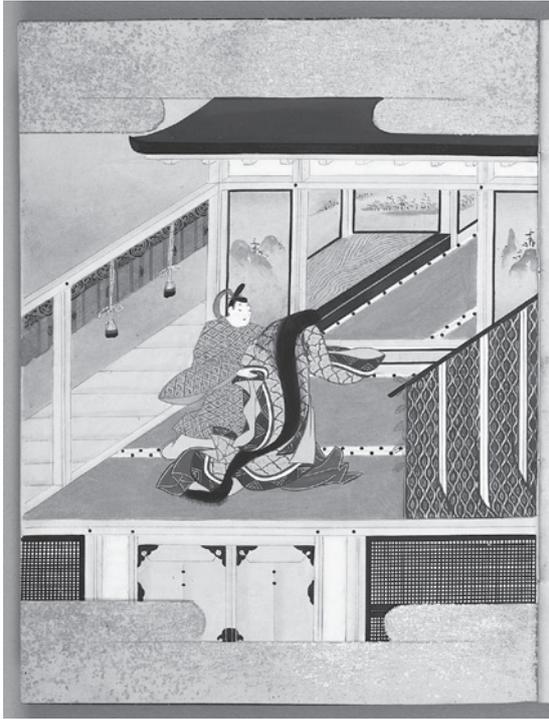
図版八



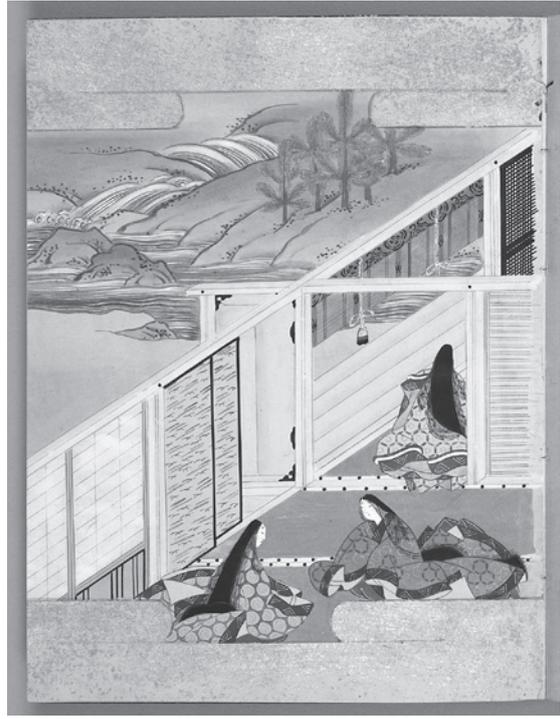
図版二一
(第四〇図)



図版二二
(第三五図)



图版一四
(第四七图)



图版一三
(第四六图)



图版一五
(第五九图)

表一 参考に、下段に場面に対応する箇所を新潮日本古典文学集成『狭衣物語 上・下』における巻数、頁数、場面番号(赤字の見出しの通し番号)の順に示した。また、通し番号の上に付したカッコは、挿絵の連続する痕跡が見られる箇所である。

通し番号	承応版本通し番号	場面の内容	新潮集成該当箇所
第一冊(一之上)	(墨付紙数) 六一枚		
		場面の内容	新潮集成該当箇所
1	J 1	狭衣、山吹を源氏宮のもとに届ける。	上巻・一〇〇―一頁・1
2	J 2	路傍の家の女、狭衣の従者に菖蒲を託す。	上巻・二二頁・9
3	J 4	狭衣の笛の音に感応した天稚御子が降臨する。	上巻・三二頁・14
4	J 5	狭衣、源氏の宮を訪ねる。	上巻・四四頁・22
5	J 6	狭衣、母宮と結婚について語り合う。	上巻・五一―五三頁・26
6	J 7	狭衣、飛鳥井女君(以下、飛鳥井)と僧の乗る車に遭遇する。	上巻・五七―五九頁・30
7	J 8	狭衣、飛鳥井を訪ねる。狭衣は姿を見せず乗車のまま。	上巻・六二―六三頁・33
第二冊(一之下)	五二枚		
8		源氏宮、几帳の陰に隠れる。(見開き)	上巻・七四頁・39
9		除目により狭衣は中納言に昇進する。	上巻・八一頁・44
10	J 9	今姫君のもとに立ち寄った狭衣を、女房達が几帳の陰より覗き見る。	上巻・八二―八四頁・44
11	J 10	狭衣、飛鳥井を訪ねる。	上巻・九五―九六頁・53
12	J 11	飛鳥井、筑紫行きの船に乗せられる。	上巻・一〇六―一〇七頁・60
13	J 12	飛鳥井を思い、外を見やる狭衣。空には雁が飛んでいる。	上巻・一一七―一九頁・66
第三冊(二之上)	五六枚		
14		道季から飛鳥井入水の噂を聞く狭衣。(見開き)	上巻・一二九頁・70
15	J 13	女二宮が琴を弾く様子を垣間見る狭衣。	上巻・一三八頁・77
16	J 14	文を書く中宮のもとに行き、女二宮に後朝の文を書こうとする狭衣。	上巻・一四五―一四六頁・82
17		皇太后宮、狭衣が女二宮のもとに落ちていった畳紙を手取る。	上巻・一五二頁・85
18	J 15	皇太后宮、暑い折に扇で煽いで女二宮の看病をする。	上巻・一六一―一六二頁・91
19	J 16	狭衣、皇太后宮邸に見舞いに訪れる。	上巻・一七五―一七六頁・99
第四冊(二之下)	七二枚		
20		皇太后宮の崩御を悲しむ女二宮達。	上巻・一八四頁・105

44	J 32	狭衣、釣殿で読経。入道宮は念仏に励み、御簾の外では中納言典侍が若君を抱く。	下巻・一五八～一五九頁・253
43		入内した弘徽殿女御(かつての女一宮)を訪ねる狭衣。	下巻・一四六～一四八頁・244
42	J 31	御禊に出発する齋院の唐車。沿道には見物客。	下巻・一三四～一三六頁・236
41	J 30	狭衣、齋院(かつての源氏宮)を訪ねる。側にいる猫を呼び寄せる。	下巻・一二三～一二四頁・229
第七冊(三之下)			
40		※一条の宮邸の様子か。(図版一二)	下巻・一一九頁・225
39	J 29	若宮と戯れる狭衣。袴着が行われる。	下巻・一一五～一一六頁・223
38	J 28	一品宮邸で養育されている飛鳥井の遺児を見、抱き上げる狭衣。	下巻・一〇五頁・216
37	J 27	入道宮、狭衣の文に返歌を書く。	下巻・八七～八八頁・204
36	J 26	狭衣、大和撫子を入道宮(かつての女二宮)に遣わす。隣には若宮。	下巻・七九頁・198
35		※狭衣と一品宮がいる図か。一品宮降嫁後の姿を描いたものか。(図版一一)	下巻・七二～七三頁・194
34		狭衣、一品宮里邸(一条院)にて命婦に飛鳥井の遺児(狭衣の子)のことを尋ねる。	下巻・六四～六五頁・189
第六冊(三之中)			
33		髪を下ろす今姫君と泣き伏す母代。	下巻・六〇～六一頁・185
32	J 25	今姫君の寝所に立ち入ろうとする宰相中将と、捕らえようとする母代や女房達。	下巻・五七～五八頁・183
31		常盤の尼がいる仏間。隣室では侍女達が語る。	下巻・五〇～五一頁・179
30		馬に乗り、常盤の里を目指す狭衣。	下巻・四二～四三頁・173
29	J 24	今姫君が琵琶を弾き、母代が唱歌する様子を見る狭衣。	下巻・三四～三五頁・169
28	J 23	若宮を訪ね、笛を吹く狭衣。	下巻・二〇～二二頁・159
27		粉河から下山する狭衣。	下巻・一〇頁・152
第五冊(三之上)			
26	J 22	粉河寺を参詣する狭衣。	上巻・二四九～二五〇頁・148
25	J 21	狭衣、源氏宮が齋院に出発の際、名残を惜しんで衣の裾をつかむ。	上巻・二三七～二三八頁・140
24	J 20	狭衣が笛を、源氏宮が琴を合奏する。池では舟遊びが行われている。	上巻・二二四～二二五頁・130
23	J 19	若宮(狭衣と女二宮の子)の五十日の祝いにて、初めて我が子と対面する狭衣。	上巻・二一四～二一五頁・122
22	J 18	雪の朝、雪山に興じる源氏宮を見る狭衣。	上巻・二〇〇～二〇一頁・114
21	J 17	師走の月夜に皇太后宮邸を訪れる狭衣。	上巻・一九四頁・111

表二 アは寛永中刊十三行古活字本、イは承応版本、ウは本書の本文。ウの下に付したカッコは新潮日本古典集成本文の該当頁であり、引用文に見られる空格や傍線は筆者が施したものである。

<p>a ア おほすなるへし 女君にもおい人のにくむ成 へしな ことほりなりや イ おほすなるべし 女君にもおひ人のにくむなるべしな ことほりなりや ウ おほす成 へし な ことほり也 や (上巻九〇頁)</p>	
<p>b ア いとあやしと見思ひけり あすはありとも思ふ へうもあらぬ世に いま一たひみ奉らてやとおほすはいと忍 イ いと しのびがたきに ウ いと 忍 ひかたきに (上巻一六九頁)</p>	
<p>c ア 雪もかきくらし ふりつもる庭のおもは人めも見えず いと心ほそさもまさるにおきたる人のけはひもせねは イ 雪もかきくらし ふりつもる庭のおもは 人のけはひもせねば ウ 雪もかきくらし ふりつもる庭のおもは 人のけはひもせねは (上巻一九四頁)</p>	
<p>d ア 返事を見給ふも いまはしめたるにはあらねと いかうき物 におほししめられにける我 心のうらめしさを イ 返事を 返事を うきものにおほししめられにける我 心のうらめしさを ウ 返事を うき物 に思 ししめられにけるわか心のうらめしさを (下巻二四頁)</p>	
<p>e ア やすき空 なく思ひかたけし心のうちは など露はかりもかなふ事のなかりけん イ やすきそらなく思ひくだけし心のうちは など露ばかりもかなふ事のなかりけん ウ やすきそら 心のなかりけん (下巻一一三頁)</p>	
<p>f ア ひめ君のかきりを イ ひめ君をかはりに ウ ひめ君をかはりに (下巻三三〇頁)</p>	<p>g ア かくは (加階、筆者注) しけり イ かくは しけり ウ かくは しけり (下巻三三八頁)</p>
<p>h ア の給はせて つきせすうつくしと思ひ聞えさせ給へるさま イ の給はせて つきせすうつくしと思ひ聞えさせ給へるさま ウ の給 へるさま (下巻三四九頁)</p>	